The Japan Society of Educational Sociology

文化による再生産としての教育 ── ブルディユー理論の構造

宮島　喬（お茶の水女子大学）

1．ピエール・ブルディユーの仕事（その多くは，J－C．パスロンとの共同になるものだが，ここでは彼の名で代表させる）は，一般化された命題提示の形をとるが，６０年代フランスの社会文化的状況をふまえて発想されていることは否定できない。すなわち，1）階級による社会化パターンの相違が比較的根強く残り，2）規範化された言語文化が確然と存在し，3）そのなかで高等教育進学率が増大するというのが，当時生じていたことである。フランスにおける上層階級（エリート）に焦点をあわせた階級構造再生産の指摘の試み自体はすでにこれに先だって存在していた（たとえばGirard，1961など）。しかし，ブルディユー理論は，いくつかの独自の視角，概念，理論枠組をもっていて，従来の統計的な事実確認を超え，再生産過程のより内在的把握への可能性を秘めているといえる。

2．ブルディユーは，進学や学業上の成功（réussite scolaire）を左右する条件として，経済的条件に還元できない文化的要因に組織的に注目している。この意味で，文化を通しての再生産という理論構成がまさしく中心であるといってよい。この文化的要因の把握は，次ぎのようにきわめて多次元的になされている。（1）それぞれの社会的ミリューの中で社会化をとげてきた生徒が大学というものに対して抱く主観的なイメージや観念（Bourdieu et Passeron，1968,pp.15 ～17），（2）おなじくそれぞれのミリューのもとで習得してくる言語行動の型，とくに「複雑な〔文の〕構造を解読し，かつ操作する能力」（同上，１９７０，ｐ．92 ）の有無，（3）それら「言語能力」に優劣を刻印する基準としての規範化された言語ないし「教養言語」（langue savante）の存在。これらはいずれも「ハビトゥス」（habitus）という概念によって捉えられており，かれの再生産論のなかにハビトゥスはキー概念の位置を占めている。　このハビトゥスは，ある個所では次ぎのように規定されている。「持続的な性向の体系，構造化する構造として機能すべくあらかじめ傾向づけられた構造化された構造，すなわち，客観的には『規制され』，かつ『規則的』でありうるが，なんら規制への〔意識的〕服従の所産ではなく，目的に意識的にねらいをつけることなしに，しかも客観的にはその目的に適応せしめられているような実践および表象の生成原理としての構造化された構造」（Bourdieu,1972,p.175）。　この「ハビトゥス」に着目するということは，教育という場で適応と選別の原理として作用している，ほとんど意識されることのない，しかし環境に応じて諸個人の内に構造化されている態度的性向に目を向けさせるものである。不可視の選別過程への一つ切り込みの視角として重要であろう。

3．ちなみに，ブルディユーのこうした方法的志向は，M．ウェーバーとの親縁性を感じさせる。論者によっては，彼とマルクスとの関連を強調し，あるいは彼とデュルケムの集合意識論とのつながりを論じるということが行われてきた。もちろん，そうした関連も重要であろうが，そのハビトゥス論は，一方でウェーバーのエートス論へ，他方では彼の「正統的支配」の議論へとより内的なつながりをもっているように思われる。文化，あるいは理念的なものの相対的に独自な作用に対するその洞察は彼を，マルクス，デュルケムよりもウェーバーに接近させているといえよう。

4．ところで，このハビトゥスを，とくに言語にかかわるハビトゥスとして考察し，階級ごとに形成されるハビトゥスと，規範化されたハビトゥスとの距離を問題とするところにブルディユーの力点がある。この点を明らかにするため，彼は経験的調査をも手

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

がけている。その調査は，「学生とその勉学」および「学生と教育言語」と題されたもので，大学生を対象に実施された（Bourdieu et Passeron,1964, Bourdieu,Passeron et De Saint Martin,1965)。後者から例をあげてみれば，次ぎのような調査項目がある。

1．文章中に不適切に用いられている単語を指摘させる設問

2．言葉の厳密な定義を求める設問（antinomieなどの語）

3．言葉のすべての意味を列挙させる設問（attribut,fonctionなど）

4．言葉の正確な定義を選ばせる設問（contrepoit〔対位法〕，Protee〔プロテウス〕など）

以上のような設問で問われている「言語能力」は学校的文化のなかで範型化されている言語ハビトゥスにかかわるものであり，また同時に上層階級の子弟の社会化のなかで習得されるそれときわめて親近性をもっている。これらの調査を出発点とするブルディユーたちの基本テーゼは，学校がおしえこむ規範化されたハビトゥスと，学校以前に生徒たちの学んでくるハビトゥスとの間の距離の大小が彼らに対する教育的営為の「生産性」を左右する，としている（1970，p．89～90)。

5．ただし，これらの調査とその結果は，必ずしも経験的一般化の手続きを通してその諸テーゼと結びつけられているとはいえず，彼らの理論構成における経験的調査の位置づけはいまひとつ曖昧である。この意味で，ブルディユー理論の特徴を「反実証主義的」な「批判的社会学」の流れとして捉え，その方法は仮説の検証によりも，仮説の「形成」により志向している，と論ずる見解もあり（Dimaggio，p. 1467)，この見方は妥当であると思われる。

6．ブルディユーにおける言語資本の概念はよく知られているが，この語は，教育上の選別や文化的支配のフィールドを経済市場との類比で捉えようとするところからくるアナロジーの色彩が強い。したがって，どこまで利用可能な概念でありうるかは疑問の余地がある。ただ，この概念をあえてブルディユーを用いるのは，教育の選別過程での言語ハビトゥスの機能にするどく着目するからであり，また言語を単なるコミュニケーションの道具としてではなく文化的ヘゲモニーの乗り物とみる見地にたつからである（Bourdieu，1977)。

6．ブルディユーに対する方法上の批判はすでに多方面から提出されている。それらの検討は必要である（ただし，本レジュメでは省略)。ただ，彼の理論自体は高度に戦略的に発想されているものでありしかも一種の批判理論的な構成がとられている点を考慮するなら，同理論への外在的批判（「建設的でない」，「宿命論的」，「閉じた理論」等々）はむしろ彼の意図と噛み合わないものとみるべきではなかろうか。　それよりも，文化的なものを通しての選別一再生産の過程についての彼のするどい洞察を個々に検討し，受けとめ，その有効な含意を具体的に引き出すことが重要であると思われる。

Bourdieu, Ésquisse d'une théorie de la pratique,Droz,1972

———, l'Économie des échanges linguistique, in Langue Française,34,mai,1977

Bourdieu et Passeron, Étudiant et leur études,in Cahier du Centre de Sociologie Européenne, Nol,1964,Mouton

———, les Héritiers, Minuit 1968

———, la Reproduction,Minuit 1970

Bourdieu, Passeron et De Saint Martin, les Étudiants et la langue d enseignement,in Cahier du Centre de Sociologie Européenne,No.2,1965

Dimaggio, P.,Review essay :on P.Bourdieu, in A.J.S. Vol.84,No.6,1979

Girard, A.,la Réussite sociale en France, 1961

NII-Electronic Library Service